

# 月島 級特殊電波兵器試験艦 ( T u k i s i m a C l a s s I J N )

(元ネタ「雫」(Leaf)より月島 拓也・月島 瑠璃子)

(編集部注) この記事は昭和36年発行の「旭日グラフ」に掲載された記事を再録したものである。記事の内容に情報が大幅に削除、隠蔽された部分が見られ、現在知られている戦史とは食い違う部分があるが、敢えてそのまま掲載することにした。

日本海軍が初めて作り出した電波作戦艦。ベースとなったのは戦艦 伊勢 級。最近ではトンデモ兵器の代表として知られている。

戦艦 伊勢 は当初 扶桑 級の三番、四番艦として計画された。しかし、第一次大戦中のジェットラント沖海戦で一番艦 扶桑 が沈没し、また日本戦艦の数々の問題点が露呈されたことから、急遽 扶桑 級三番艦 伊勢 を 瑞穂 と改名、改 扶桑 級として大戦に投入すべく建造することとなった。これにより残された四番艦は 瑞穂 級をさらに改良した 伊勢 と命名され、また新たに 伊勢 級二番艦として 日向 を建造することとなった(これには、大戦による特需が影響している)。大戦中は 瑞穂 の建造に全力を尽くしたために 伊勢 級の2隻の完成は大戦後となったが、そのおかげで 扶桑 級で現れた欠点をさらに吟味して改良を施すことが出来た。本論から外れるので詳しくは述べないが、大きな改良点として 来栖川《長門》芹香 級と同様の檣楼構造(三脚檣の廃止)、集中防御機構の採用などである。こうして 扶桑 級と比べてまずまずの性能となった 伊勢 の生涯は産声を上げたときの混乱と同じく波乱万丈であった。数々の改良を施したと言っても、完成後わずか一年で 来栖川《長門》芹香 級の出現によって日本最強戦艦の座を滑り落ち、さらに続々と竣工する八八( )艦隊計画艦や他国の最新鋭艦の登場であつという間に旧式化してしまった。さらには八八( )艦隊計画や海軍施設拡張のための機会、そして予算さえ回って来ることは無く、練習艦同然の扱いを受ける程になっていた(八八( )艦隊計画戦艦が全艦完成したころのある唄には「敵を撃滅八八( )艦隊 伊勢 や 日向 」の敵いずこ」というなんともいえない歌詞が存在しているが、本級のおかれた状況を的確に皮肉っていると言えよう)。

そして1938年(昭和13年)、不運としかいえない彼女達の運命に大転機が訪れる。ナチス・ドイツの台頭、合衆国との関係悪化のなか、無能な近衛内閣の「有事を避けるための対米独“融和”政策」の一環として、「肥大化した海軍軍備の“一時的”縮小」を打ち出したのだった。具体的には「旧式艦の解体、実戦部隊からの除外」や「建艦計画の縮小」などがこれにあたる。軍部にとってはリップサービス以外の何者でもない方針であった(そしてどの国も信じていなかった)が、海軍はこれ幸いといわんばかりに国から差し出された予算を使うことで軍の「縮小」を行い、その代わりに八八( )艦隊計画によってあまり進んでいなかった「近代化」を「縮小」によって浮いた金で行おうとしていた(パシフィック・ストーム計画)。伊勢 級もその「近代化」の影響から逃れられるはずも無かった。海軍省は完全に旧式化しつつある 伊勢 級を解体、その資材を艦隊「近代化」にあてることを決定したのだ。要するに新型戦艦建造の資材を 伊勢 級から調達しようとしたのである。また、二番艦 日向 が第五、第六砲塔を爆発事故で失い、さらに第3、第四砲塔のバーベットがゆがんでしまい使い物にならなくなるという事態がそれを後押しした。海軍省は足手まといのうえに事故まで起こした旧式戦艦に、価値を見出していなかった。

いうまでもなく、この廃艦案には海軍内部（GF、軍令部）では猛反対が 起こらなかった

八八（ ）計画によって理想の艦隊を手に入れ、さらには 長谷部《高千穂》彩 などの高速戦艦などが完成した今、低速で、時代の要求に取り残された 伊勢 級を後生大事に保有するより、その資材を用いて次世代艦（噂では 高瀬《大和》瑞希 と命名されると言われている）新型戦艦などを（有事に備えて）建造、もしくはそれに見合う改良を八八（ ）艦隊計画艦に施す方がよい。いまだ根強く大艦巨砲主義に支配された海軍将校の大半はそう考えた。ちなみに、より旧式の 山城 瑞穂 は「日本の別名がつけてある艦を廃艦にするのは縁起が悪い」という意見で保有存続が決定している。

というわけで、名前にまで裏切られた 伊勢 級にその不運のとどめが刺される時が来た。大艦巨砲主義者達はそれを当然のものと受け取った。

だが、ここで思わぬ助け舟が、解体を待つばかりとなっている 伊勢 級に差し出された。

その勢力を衰えさせていない「エクストリーム論」派、その中でも航空主兵を目指す者達と、都下月島にその本拠をおく大本营直属の電波技術本部、自称「星斗会」（海軍省の海軍電波本部と陸軍の多摩技術研究所を統合したもの。別名「毒電波研究所」）が解体中止を訴えたのである。もちろん彼らの言い分はこうだった。「俺達の好みに改造させろ」。航空主兵派はいうまでもなく空母への改造だった。ある程度の空母がそろいつつあった 初代 千鶴 や 森川《雲竜》由綺 など が、彼らは満足などしていなかった。関係者達に意外だったのは、略称「電本」（「毒研」の方がメジャーな呼び方だった）の介入だった。彼らは 伊勢 級一艦でも良いから電波実験艦に改造してほしいと訴えたのである。伊勢 級などの戦艦はいまだ小型化がむずかしい電波兵器のよいプラットホームだった。こうなっては廃艦やむをえずと考えていた大艦巨砲主義者達も意見が違ってくる。ここに毎度のことのように 伊勢 級リサイクル案について混乱が生じた。もちろん全てのとぼっちりを（いつもの様に）食うのは艦政本部だった。やれ空母だやれ実験艦だやはり戦艦が一番だいやいやここは初心に戻って廃艦に 。よほどこの混乱（もしくは無茶苦茶な要求）が頭に來たのだろう。艦政本部は 伊勢 級のリサイクル案について「用兵側の“全ての”要求を満たす」設計を決定事項として彼らに叩きつけた。

“全ての”要求を満たす設計。そう、“全て”である。

伊勢 級は、恐るべき事に「航空電波戦艦」として復活することになったのだ。議論を続けていた者達は返す言葉もなかった。そして文句も出なかった。このまま不毛な議論がつづけば、結局は解体されてしまうことが目に見えていたからだ。その最悪の事態より「有事になったら」自分達の望む姿に改装できる」改造を施す（彼らはそう解釈した）ほうがマシ。そう考えたのだ。つまり、誰も戦場で改装後の 伊勢 級が役に立つとは思っていなかった。結局、伊勢 級の改造は以下の点を代表的なものとして行われた。一、第三～第六砲等までで撤去。残る主砲は第一、第二の四門のみとする。二、艦尾の第五、第六砲塔の場所には後檣の後方に巨大な飛行機格納庫を設け、その上を }} 飛行甲板とする。三、艦中央の第三、第四砲塔の場所には数々の電波実験兵器を搭載。艦内部にはその制御室。四、副砲は全て撤去。かわりに対空兵装を充実。大改造であった。これらの改造は当初の「資材確保」の精神などどこかに置き忘れて、さらなる資

材を要求した。海軍省にとっては悪夢のような現実だった。

だが、彼女の変身(あるいは悪夢)はまだまだ終わらない。「なんだ、あんな要求が通るんじゃないか」と合点した様々な立場の者達が、これまた様々なアイデアを改造中にも関わらず持ち込んできたのだ。結果、上記の改装に加え、五、実験兵器搭載専用艦とする(たとえば噴進弾など)六、有事に際のGF司令部としての機能を持たせる(及び通信機能の充実)七、無線航行機能をつける(標的艦としての能力)が、付け加えられた。もはや「どうせ廃艦になる運命だったのを救われたドンデモ艦だから何やってもいいよな」というやけくそ気味の考え(あきらめ)が艦政本部にあったのがあきらかである。また、当時の英国海軍士官の言葉に改造中の伊勢級を評して「“軍艦”とはかくあるべきか」とどこかで聞いたような言葉を述べたが、今度はさらにきついジョークが含まれているのがありありと感じられる。(海外での月島級は「オゾム」と呼ばれる事となる)。

そして昭和14年、日本の優れた艦艇技術に名を残す速さで改造を終えた一番艦伊勢は、「こんなフネに戦艦の名はいらん」という用兵側の意見と、「我々の本拠の名を(そうしなけりゃ毒電波が...)」という出所不明の脅迫によって、名を月島と改めた。なお二番艦日向は乗組員側の「毒研が一隻だけでいいっていいのだからせめて電波実験兵器だけは載せないでくれ」という意見により、電波実験兵器のかわりに飛行甲板を拡張、二番艦は多少マシなフネになると思われたが、星斗会が設計終了直前に一番艦と同じ改造を施すことを要求したので、結局は完全な二番艦瑠璃として完成した(当然、改造期間は増加した)。このことを元日向乗組員は「兄貴に(設計思想を)犯されたようなものだ」ときつく述懐している。

以上のように、あまりにも「狂気の扉を開けてしまった」艦となってしまった伊勢級改め月島級だったが、その延命された余生もまた狂ったものとなった。まずは搭載するはずの航空機を手に入れることができず(そんな艦につむ飛行機の余裕などないところでも門前払いされた)、格納庫はがらんどうの空間と化した。一方、4門だけ残された主砲は「主砲発射の衝撃が電波兵器に悪影響を与える(要するに壊れる)からできる限り撃つな」と要求され、砲術技量と砲員のやる気は極端に低下する。さらには反対にやる気満万の電波兵器関係者(ほとんどが「星斗会」から派遣された)はチャンスとばかりに電波兵器の試作品を飛行甲板、艦橋にまで設置。その結果、たとえば改造数ヵ月後までに月島に搭載された電波兵器は・一号一型滞空電探(日本開発、陸上設置型)・試作一号三型対空小型電探(日本開発、艦載型)・二号一型対空電探(日本開発、大型艦限定艦載型)・試作二号二型対艦電探(日本開発 艦載型)・「フレイヤ」警戒対空電探(ドイツ開発 中国内戦で鹵獲、陸上設置型)・CH・CHL警戒対空電探(イギリス開発、技術交流の一環で入手、陸上設置型)・試作大型電探(日本開発、陸上設置型) e t c...という電波兵器のオンパレードとなっている。さらにこれに無線操縦装置や、無線航行装置などを備え付け、全身これ電波発生器のかたまりと化していた。

このように最新兵器で身を包んだ月島であったが、周囲の理解度は非情なまでに低かった。人々に電波兵器の理解自体少なかったこのころ、彼女は「闇夜に提灯」論や「電探かんざし」論のため周囲にひどく疎まれた存在であった。以後の同種の特務艦が苦闘しつづけることになる電探の理解を得るための戦い、そのプロローグが始まったのだ。また、搭載していた電波兵器の大半は試作段階であり、実戦に耐えうる艦ではなかった。ある意味月島は先見的過ぎて「狂って」いた、とも言えるのである。だが、「星斗会」は月島級の「暴走」を止めなかった。否、暴走をエスカレートさせ、ますます狂気の扉の奥へ踏み込んでいった。彼らはこの後、数々の射

撃装置（主砲含む）やGF司令部用に作られたスペースにまで手をつけた。（一部の例外を除き、だれもこのようなフネに司令部などおきたくなかった）。砲はもちろん電探にリンクさせ、司令部スペースには電探その他によって手に入れたデータを集約させる情報管制センターに（俗称「星斗会室」）に。

それが狂気の扉の向こうだった。

そう、月島 級は日本における防空、対艦電探射撃システムの構築にとどまらず、戦闘情報管制センター（CIC）、さらには航空機誘導所（FDS）など数々の近代艦に欠かせないシステムの基礎を築く実験艦となったのだ。ある意味、海軍省の目論みは結果的に成功したと言える。月島 級は、日本海軍のあらゆるシステムの近代化に深く役立ったのだ。最近はその特異性ばかりに注目して本級の意味を取り違える専門家も存在するが、断じてそのような評価はふさわしくない。

しかし、この 月島 級のすべてに高い評価を与えることが出来ないというのも事実である。奇想天外な艦であるということに変わりはないし、改造当初の「航空電波戦艦」として活躍するのは、大戦中のアストラルバスターズ結成を待たなければならなかった。（それまでは完全に電波実験艦だった）。

そして、彼女には最大の汚点が存在している。 標的艦 太田 暴走事件。日本海軍における惨劇の一つに、2隻は深く関わっている。 その日、電本（星斗会）は呉近海で都下月島からの操艦指示を 月島 経由で 太田 に伝達する実験を行っていた。両艦とも無人で、月島 の操作は 瑠璃 が行っていた。（このため、事件の原因が都下月島にあるのか 月島 にあるのが謎となった）。近海には旧式化の激しい 月島 級に変わる特殊電波実験艦 長瀬（1）が、電探射撃同調実験を 新城《穂高》さおり と行っていた。また、瑞穂 をはじめとする諸艦艇も訓練に励んでいた。 実験がなかば成功しようとしていたその時、突如 月島 が 瑠璃 の操作を離れ迷走し始めた。続いて、太田 もそれにつられるように迷走する。まるで、月島（もしくは都下月島）に操られているかのよう。

そして

補足的説明ではあるが、この後 瑠璃 は実戦での使用が不可能、また修理費に莫大な費用と時間がかかると判断され、上層構造物のほとんどを撤去（もしくは事件時に破壊）され、呉鎮守府の番号名の雑役艦と格落ちした 月島 の名を継ぎ 月島() と名乗ることとなる（原因は諸説あるが、有力なのは星斗会の要望と事件をマスコミに暴かれた海軍のメンツ保持という二つが重なったためと思われる。なお、瑠璃 の名は重巡に受け継がれる）。しかし乗組員達は当初から使っていた「瑠璃子さん」という呼び方を変えることはなかった。（ある艦長の「月島 瑠璃子発、長瀬 宛て。貴艦に電波は届きしや？」のセリフはあまりにも有名）。またアストラルバスターズでその優秀な電探能力と、比較的優秀な艦載機能力（これは電波兵器の小型化に伴い、元第三、第四砲塔設置位置まで広げた飛行甲板を、艦橋の左側に前方に向けて斜めに延長する改装 アングルド・デッキを取り付けたことにより従来通りの艦載機運用が可能になったことによる影響。航空巡洋艦 佐藤 とほぼ同様の設置方法である。ただしカタパルトが装備されるまで発艦は困難を極めた）、強力な防空能力を発揮し、同隊の危機を何度も救った。加えて数々の輸送船団護衛にも参加、活躍した。その間にも相変わらず実験兵器の搭載は続けられており、対空噴

進弾口サ砲や数々の誘導弾、果ては回転翼機に垂直離陸機までも運用し、日本で一番「新兵器を早く使う」艦となった(近年、反応動力を搭載していたとかレーザーを発射できたという噂が立っているが、あきらかに眉唾物だろう)。乗組員に言わせれば、全て(の兵器)を包み込むようなやさしさをもった艦、だそうだ。その意味でも、狂気に彩られた彼女の生涯が幸運であったか不幸であったかは判断が付きかねる。なお、いついかなる場合でも、彼女のコードネームは「るりるり」であった。

要目(カッコ内は 太田 暴走事件時)

全長 220メートル(223メートル)全幅 34メートル(アングルド・デッキ含まず)機関  
出力 8000馬力基準排水量 3200トン(3440トン)兵装 主砲 45口  
径36センチ連装砲2基4門 高角砲 12.7 高角砲連装8基16門(長10センチ高角  
砲連装14基28門) 搭載機 水上機20機(艦載機28機) その他 時期によって変化

( 1 ) 同名の艦として英国に供与され、セバスチャン の名で伝説的な活躍をした軽巡が存在するが、それとは全く別の艦であるため注意されたい。

追記

なお、彼女 月島( ) の最後は、一説にはアストラルバスターズとして東太平洋海戦に参加し、合衆国艦隊を毒電波で翻弄した後、壮烈な最期を迎えたという話もあるが、そうではないのかもしれない。